

小学校外国語指導法についての一考察  
～「気付き」を促す指導～

竹 田 忠 弘\*

A Study of Teaching English at Elementary Schools  
～Focusing on “Awareness”～

Tadahiro Takeda

要約

小学校で音声指導をはじめとする指導を効果的に行うためには、英語と日本語の発音、アクセント及びイントネーションの違いを意識する児童の「気付き」がなければならない。

同様に、小学校教員志望の学生にも、英語と日本語の違いを強く意識させる「気付き」のある学びを提供すべきである。その一つとして、英語による正しい発話ができるよう、音声指導や文法指導にも力を入れる必要がある。

キーワード：音声指導、気付き、正しい英語

Abstract

In order to teach English more effectively at elementary schools, pupils should learn to be aware of the differences between English and Japanese, such as, pronunciation, accent and intonation.

University students wishing to be elementary school teachers should also be aware of the differences between English and Japanese and learn to use proper English.

Keywords: Pronunciation Practice, Awareness, Proper English

---

\* 受理年月日 2018 年 12 月 28 日、高松大学発達科学部准教授

はじめに

2018年度、大学の前期授業で「外国語活動（英語）指導法研究」を担当した。受講生は発達科学部の4年生11名で、その内7名が小学校の教員を目指して勉強していた。したがって、受講生全体の授業に対する取組も極めて意欲的であった。将来、小学校教員として、児童に英語を教えることになるかもしれない学生に直接接して、指導法を自らも学びながら学生に教えることは楽しいと同時に難しさもあった。前述のとおり熱心な学生が多かったため、熱心に言語活動が行われ、活気のある授業づくりができた。その一方で、小学校に新しく導入される「外国語活動」及び「外国語」の指導法や教材の開発も兼ねていたため、各回の授業内容の準備に苦勞もした。

そこで、小学校の校内研究会や小学校教育研究会外国語部会主催の研修会に足繁く赴くこととした。2020年度から小学校第3・第4学年で「外国語活動」が、第5・第6学年で「外国語」が導入されることになっているが、香川県内の小学校では、すでに先行実施されており、中には、市教育委員会の研究指定校として、1年生から6年生まで全学年全児童が英語を学んでいる学校もある。幸い、高松市立川添小学校の校長が長年の知己であったため、快く授業参観等を認めてくれた。平素の授業を学生3名と共に参観させてもらったこともある。学生は、参観するというよりは、むしろ授業に参加したのであって、すぐに子どもたちの輪に入り込み、楽しく活動した。学んだことも多かったはずである。機会をとらえて実際の授業の様子を体験させるのが一番いい演習であると痛感した。本研究ノートでは、研究会等で得たことをまとめ、今後の研究及び授業改善の一助とする。

また、半年間学生に指導法を教えて、英語を専門としていない学生が、模擬授業における英語による指示や発問の際、どのような間違いをするかなど、様々な発見があったため、学生が陥りやすい間違いの内容を示し、今後の指導に役立てる。

## 1. 「気付き」を促す授業

筆者は、2018年6月14日、高松市立川添小学校の公開校内研究会に参加し、研究授業参観、授業説明・討議により、同校の英語の授業を目の当たりにした。4年生の「外国語活動」の研究授業は実に活気があって、楽しく、筆者にとって示唆に富むよい授業であると思った。しかしながら、指導助言者として招聘されていた2名のうち、神戸市外国語大学の横田玲子教授の指導・助言の内容に少なからず驚くとともに、英語の音声指導の大切さを痛感させられた。

横田教授は、3・4年生はきちんとした音声を聞かせることが必要であると言う。しかしながら、研究授業において、音声を聞いて日本語との違いに気付かせる場面や思考の場面もなかったというのである。筆者は児童が大きな声で英語を発音する様子を見て、単純によく学んでいると考えていたのであるが、児童にはよりよく学ぶための工夫を凝らしたより効果的な指導法を提供しなければならないと教えられた。具体的には、大きな声で発音させるよりも、大切なのは英語を聞き取れる力を養うことであり、そのためには、例え

ば、ABCのCの発音、“See you.”のSeeの発音を一回ではなく、もう一回聞かせることによって、日本語の「シー」との違いに気付かせることが必要であるということだ。児童側からの「気付き」を促すようなひと手間の工夫がなされなければならないのである。

同研究授業の授業者が主張点あるいは柱と呼んでいる、授業の目標とも言える次のような説明があった。「対話を通して学びを深めるために、中間評価の場を設定する。アイコンタクトやジェスチャー、スマイルなどに気を付けたり、“Thank you.”や“Sorry.”など、相手のことを思いやり親切に対応したりすることで、相手に自分の気持ちや考えが伝わりやすくなり、お互い気持ちのよいコミュニケーションができることに気付くであろう。そのため活動を通して、コミュニケーションの楽しさを感じたりよりよく伝えたりすることができる」と考える。」この目標の設定は、活動が一回終わったところで、中間評価を実施し、二回目の活動が改善されることを目指したものである。筆者は参観者として前半の児童と後半の児童では、後半の児童の方が、中間評価後に活動することができて、よりよい活動を体験できるという感想を抱いたに過ぎなかったが、横田教授は違っていた。「音声指導をもっと工夫して実践する必要がある。道徳の授業ではないのだから。」と評した。確かに、コミュニケーション活動の際、アイコンタクトを取りながら笑顔で言葉を発することは、素晴らしいコミュニケーションの在り方である。しかしながら、児童たちはコミュニケーションの手段としての言葉を習っているのであり、発音やアクセント等が日本語と大きく異なる英語という言葉そのものがおろそかにされては本末転倒である。横田教授は、「このままでは、いくら続けても子どもたちの英語の発音は上手になりません。」と言い切った。

では、いかにして音声指導をしたらよいのか。発音、アクセント、イントネーション及びチャンクを意識させる「気付き」のある言語活動を心がけなければならないということであるが、「気付き」を促すとはどのようなことであろうか。横田教授の言う「気付き」について考察する。小学校学習指導要領（平成29年告示）には、外国語活動の目標(1)に「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。」とある。また、「英語」の2 内容の項目に、「〔知識及び技能〕(1)英語の特徴等に関する事項のイ 日本と外国の言語や文化について理解すること。(ア) 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。(イ) 日本と外国との生活や習慣、行事などの違いを知り、多様な考え方があることに気付くこと。」とある。

ここで特筆したいのは、英語の発音、アクセント及びイントネーションが日本語のそれとは大きく異なることである。したがって、英語と日本語の音声の違いを強く意識し、違いに気付かせ、できるだけネイティブスピーカーに近い音声で練習し、コミュニケーション活動を行うことが肝要である。そのためには、指導者である日本人の小学校教員が、教えるに足るだけの英語力を備えておく必要があると、英語の教員である筆者はつい考えてしまうが、小学校の教員は英語の専門家ではなく、免許制度が確立されていない現状では、

完璧に近いところを求めることは難しい。小川、東（2017, p.79）は、「授業では、ALT や JTE とのティーム・ティーチング、またデジタル教材や CD の活用などで学級担任以外の音声を聞く機会がたくさんあります。学級担任は、最初から完璧な英語の発音を目指す必要はありません。先生が英語を使おうとしている姿は、児童にとって学習者のよきロールモデルとなります。児童の不安を取り除き、英語を使う雰囲気を作り出すためには学級担任の存在は欠かせません。英語運用力を高めながら、自信を持って外国語科の授業に臨みましょう。」と激励している。学習者にとって先生がロールモデルであるのは、英語の学習に限ったことではないが、初めて英語を学ぶ児童にとって、指導者である学級担任の英語に対する姿勢は大きなアピールとなるであろう。

音声指導において、聞き取れる力の養成のために、特に発音があまり得意でない児童や学生に対してどのような指導上の工夫をすればよいかを、個人的に横田教授に伺った。端的な答えが返ってきた。「極めてゆっくりと発音してやることです。」舌の位置がわかるほどゆっくりということだと理解した。小学校の授業でも、中学校や高等学校の授業でも、発音練習するときの速度はかなり速い。違いを意識させ、気付きを促すための指導の工夫には、時間をかけてじっくりと取り組むことやできるまで繰り返すことも含まれていると確信した。

筆者は、続いて7月25日に開催された平成30年度香川県小学校教育研究会高松支部外国語部会夏季研修会にも参加し、再び講師として招聘されていた横田教授のワークショップを体験した。講演資料に載っていた、ことばへの気付きを促す指導の一例を紹介する。He を男性に、She を女性に使うことを直接言葉で説明せずに、目で見て分かる場面を設定し、実際の人物を指して、He と She の違いに気付かせる指導法である。

He と She とは何か？

「He は男の子だよ！ She は女の子だよ！」の説明はまずい。

子どもがそのことに気付く場面が必要です！

- そのために必要なのは
- 1 目で見て分かる何か
  - 2 はっきりと分かる音声

その導入に、自分の学校、教室を使ってできることは？

教師は基礎的な文法事項を思い出しておく。

He と She のあとに続けられることばは、is か can のみ。

can のあとに注意せよ。He can baseball. ではない。

She can cooking. でもない。

無理に全部英語にしなくてもいい場面設定の場合も。

He is a 一年生。 He is the 校長先生。

ALT の先生に紹介するにはどうする？子どもに考えさせる。

あくまでも本当の「やりとり」「発表」を目指す。

(ワークシートの上のみの平面上、擬似的な何かでおわらせない)

講師の提案 他已紹介はどうでしょう。

現在、大学で指導している4年生の男子学生がいる。彼は、2018年度前期に、筆者の担当する外国語活動（英語）指導法研究を受講しており、前期の途中からオフィスアワーを利用して週1回1時間のペースで英語の勉強を始めた。後期には、授業はなくなったが、週3回筆者の研究室にやって来ては、一時間お互い英語でコミュニケーションを図るといふ活動を続けている。彼に英語を教える過程で気付いたことがある。それは、様々な慣用表現を教えるたびに、「その表現、面白い。」と口にし、メモを取るのである。例えば、“Piece of cake.”（朝飯前さ。）や“Let me sleep on it.”（一晩考えさせて。）などの慣用表現に接しては日本語との違いに気付き、感動を覚えるようである。筆者は、長年英語を教えてきて、生徒が「気付き」の楽しさ、うれしさをはっきりと表現したのを聞いた覚えがない。数十人の生徒に一斉授業をしてきたわけであるから、正直言って一人一人の「気付き」を確認することはできなかった。生徒一人一人は心の中できっと「気付き」を享受していたであろうと信じてはいるのだが。個人教授をして初めて、学習者の感想を常に耳にすることができ、「気付き」がいかに大切なものであるかを実感したのである。違いに気付き、面白いと気付くことは、明らかに学習者のモチベーションを高めるものであり、外国語学習を効果的に継続するのに欠かせない要素だと考える。

## 2. 教員が正しい英語を使う授業

大学生に小学校外国語指導法を半年間教えて、どの学生も極めて熱心に演習に参加したが、評価の一環として、15回に及ぶ授業も終わりに近づいた時点で、2～3人の4グループに分け、それぞれのグループに45分の模擬授業をさせた。指導案も書いて、授業もグループのメンバー全員で行うというものであった。授業後、児童役をした残りの学生に口頭による評価をさせ、筆者も、模擬授業参観中にメモしておいた良かった点や改善点を中心に口頭で評価を行った。その際、学生の英語による指示にいくつかの誤りがあったので、4グループのものをまとめ、ハンドアウトにして最後の授業で配付した。Error Analysisの結果を表1に示す。可算名詞を複数形にしないで無冠詞の単数形で用いた誤りが最も多かった。また、日本の広告などで目にするためか、Let'sの後に動詞を入れないミスもあった。

表1. 模擬授業で学生が使った英語表現の Error Analysis

Errors Classification (Frequency)	Students' Errors	Teacher's Error Correction
Plural Form (5)	1. I like cat. 2. Cat is very cute. 3. I like banana. 4. I like cat very very cute. 5. I like bear.	1. I like cats. 2. Cats are very cute. 3. I like bananas. 4. I like cats. They are very cute. 5. I like bears.

Lack of Verbs (3)	1. Let's Bingo Game. 2. Let's greeting. 3. Let's communicating games.	1. Let's play Bingo Game. 2. Let's exchange greetings. 3. Let's play a communication game.
Verbs (2)	1. Are you finish? 2. Finish?	1. Are you finished? 2. Have you finished?
Etc.	1. I think winter. 2. Do you understand its mean? 3. Any else? 4. One more. 5. Let's sing song. 6. Japanese is funny.	1. I think it's winter. 2. Do you understand its meaning? 3. Anything else? 4. Once again. / One more time. 5. Let's sing a song. 6. Japanese is interesting.

模擬授業をさせてわかったことは、授業に臨む姿勢が熱心で、筆者の英語もよく理解していると思っていた学生たちが、実際に英語を用いて授業をさせると、準備してきた指示や発問であるにもかかわらず、誤りの多い英語を使っていたということである。先にも述べたが、小学校の学級担任は、英語の授業も担当しロールモデルとしての態度を示すという責任がある。その際、完璧を期すことは不可能であり、大いに間違いをしながら自ら学び、成長していけばよいのであるが、まだまだ幼い児童は教員の真似をするのが得意である。したがって、余りに誤りの多い英語を発話し続けては、悪影響必至である。小学校の教員志望の学生は、大学時代に教育法に加えて音声や文法など、英語そのものもしっかりと学ぶこと、採用されてからは、研究と修養に努め、英語力を高めていくことが必要である。大学等における学生の学びにおいても、英語と日本語の大きな違いを強く意識するという「気付き」へと導く工夫が求められる。

### 3. まとめ

実際に小学校で英語の授業を参観したり、学生に指導法を教授したりする過程で、音声をはじめとして英語と日本語の違いに気付かせることで児童の興味・関心を高め、「気付き」を促す授業づくりが必要であることを確認した。その「気付き」は、まず教員から始めなければならない。したがって、小学校教員志望の学生に指導法を教えるに当たっても、英語と日本語の違い、また、外国と日本の文化などの違いにも気付かせる工夫や仕掛けが求められる。その違いに学生が自ら気付くことで、児童に対して正しい英語を発話できる小学校教員の育成へとつながる。

#### 引用文献

- ・小川隆夫、東仁美 (2017)『小学校英語 はじめる教科書 外国語科・外国語活動指導者養成のためにーコア・カリキュラムに沿ってー』 mpi 松香フォニックス p. 79
- ・高松市立川添小学校 (2018)『平成 30 年度公開校内研究会資料』
- ・平成 30 年度香川県小学校教育研究会高松支部外国語部会『夏季研修会講演会資料』

#### 参考文献

- ・小学校学習指導要領 (2017)